二〇二四年度　入学試験問題

国　語　（六十分）

・問題は一から三まであります。
・解答用紙は一枚です。
・解答は全て解答用紙に記入して下さい。
・句読点、記号なども字数に含みます。

一　次の文章を読み、あとの問に答えなさい。なお、出題の都合上省略した箇所がある。

A　インターネットの世界が広がり、さらにスマホが普及したことで、いつでもどこでも簡単に［1］ができるようになった。

そこで目立つのが、新しい情報機器を手に素早く検索する自分に陶酔[①]し、何でも検索すればすぐにわかるとでも言いたげな人たちである。みんなでカンダン[a]している最中にも、始終スマホをいじり、今話している話題に関連する情報を引き出し、みんなに得意げにヒロウ[b]する。それで、いっそう盛り上がることもあり、便利と言えば便利ではあるが、[1]補助記憶装置を使わないと関連する話題を出せないというのも、いかにも中身が空っぽみたいで淋しくはないか。

雑談の場のみならず、会議中やちょっとした打ち合わせ中にも、しょっちゅうスマホをいじり、その場の議論も上の空で情報検索ばかりしている人もいる。そして、何か見つけては得意げにヒロウするのだが、議論の流れから遅れがちな上に、本人が消化し熟考した上での発言ではないため、[2]取ってつけたような情報提示にすぎず、深みを感じさせない。

ネット検索によって引き出される情報は、何かを考えるための［2］にすぎない。参考になるこんなデータがある、こんな事例がある、こんな考え方がある、こんな成功事例がある、こんな失敗事例がある……。

そのようにインターネットは、いわば考えるための素材を提供しているのであって、けっして検索＝思考ではない。

そこのところを理解せずに、検索に習熟することで、あたかも自分に思考力があるかのような勘違いをしているイタイ人物も珍しくない。

日頃から自分の頭でじっくり考える習慣のある人は、ネットで検索して得られた情報はあくまで考えるための素材にすぎないことを踏まえており、使えそうな素材があれば自分の思考の枠組みを補強するような形で配置していく。

それに対して、自分の頭でじっくり考える習慣のない人は、ネット検索で出てきた素材をそのまま示すだけといった感じになりがちであり、本人がいかにも得意げに示しても、自分の頭でじっくり考える人からは、

「情報が頭のなかを素通りしてるみたいだな。なんか薄っぺらいな」

「検索しただけじゃないか。考える習慣がないんだろうなあ」

と思われてしまう。

そのような人物は、自分で考えるということがなく、思索を深める時間をもつといった習慣がないため、検索結果を示すだけで、自分なりの骨太な論理の筋道というものがないので、いくら目新しい情報を検索して示しても、どうにも説得力[3]がない。

B　たとえば、何らかの商品なり業界なりに関して今後の動向について話し合っている際に、検索して出てきた動向についての情報を紹介することはできても、

「〔　　X　　〕」

と質問されると、自分の頭で消化していないため、即座に答えることができない。自分なりの推論をすることができない。そこで、再び検索を始める。

相手からは、「また検索か。自分で考えることができないのか」と呆れられているにもかかわらず、必死に検索し、それらしい解説が見つかると、それをそのまま読み上げる。まったく説得力が感じられないため、相手は納得できず、呆れながら、

「その根拠はなんですか？」

などと重ねて質問する。そんなことを尋ねられても、自分で考えたわけではないので、根拠など思いつかない。そこでまた検索を始めるわけだが、ここまでくると、いくら検索してもそれらしき回答を見つけるのは難しい。

このようなやりとりは、今やけっして珍しいことではない。検索に頼り、出てきた情報をいくら並べ立てても、受け売りそのもので、自分の思考プロセスを通して濾過（ろか）され熟成されたものではないため、言葉に迫力がない。当然ながら説得力もなく、薄っぺらい感じが拭[c]えない。

検索ばかりで自分の頭で考えるということを怠っていると、そのようなことになってしまう。非常に便利な検索の手段を手に入れると、そうした[4]落とし穴にはまる危険もあるので、ＩＣＴ教育を行う際には十分な注意が必要である。

C　グローバル化に対応するために、もっと日本人も自己主張ができるようにならなければいけないと言われ、自己主張がスイショウ[d]されたり、プレゼンテーションのスキルをキタ[e]える授業が導入されたりしている。

でも、そうした動きは、悪くすると思考停止を招くことにつながりかねない。このようなことを言っても、②にわかには理解できないという人も少なくないかもしれない。

そこで、まずは私たち日本人が、自己主張が苦手なのはなぜかということを考えてみたい。[5]海外の人たちの強烈な自己主張に圧倒された経験がある

人は少なくないはずだ。**（中略）**

そんな自己主張の強烈な海外勢とやり合っていかねばならないのだから、大変な時代になったと思っている人が多いと思う。でも、なぜ海外の人たちは、そんなに自信たっぷりに意見を言ったり、遠慮なしに質問したりできるのだろうか。反対に、なぜ私たち日本人は、堂々と意見を述べることができず、質問するにも躊躇（ちゅうちょ）してしまうのだろうか。

日本人が堂々と自分の意見を述べることができないのは、相手の気持ちを気にして自己中心的に振る舞えないということに加えて、日本文化においては認知的複雑性の高さに価値が置かれてきたからではないか。そのように私は考える。

認知的複雑性というのは、ものごとをさまざまな視点から見ることができるかどうかということである。

日本人が意見を主張するのが苦手だといっても、けっして自分の意見がないわけではないことが多い。人の意見と自分の考えが違う場合も、人の意見を聞いていると、その人の立場もわかるし、そう言いたくなる気持ちもわかるし、そういう視点から見ればそういう理屈も成り立つように感じられるため、反論しにくくなるのである。

自分の意見を述べる際も、それが絶対的なものとは思えず、別の視点から見れば違う理屈もあるだろうなと思うため、自信たっぷりに述べることができないのだ。

6 認知的複雑性が高いと、さまざまな視点からものごとを見ることができ、とりあえず自分なりの意見があったとしても、もっと違う見方もあるかもしれないと思うから、自信満々な自己主張がしにくいのである。その結果、さまざまな視点に想像力を働かせ、思考が深まっていく。

ただし、間柄を大切にし、人の気持ちや立場や意見を尊重する日本の文化は、認知的複雑性を高めると同時に、属人思考によってせっかく身につけている認知的複雑性を封印し、思考停止に陥（f）らせることもある。

D 一方、欧米をはじめ多くの国々の人たちが、どんなに偏った意見でも、思慮の浅い意見でも、自信たっぷりに主張できるのは、自分を押し出し自信ありげに振る舞っていないと生き残れない文化で育ってきているため、認知的複雑性が低く、自分の視点に凝り固まってしまっているからではないか。自分以外のさまざまな視点から検討する心の習慣がないため、自信満々な自己主張が平気でできてしまう。

そうした視点から自信たっぷりに自分勝手な意見をまくしたてる人を見ると、まさに薄っぺらいのに自信満々な姿に見えてくる。そんな姿に劣等感を抱く必要などないし、その真似をしようとして視野を狭め、偏った意見に凝り固まる必要もないはずだ。それこそ思考停止に陥ってしまう。

もちろん自分なりの考えを練り上げることは大切だ。だが、そのためにも自分の未熟な視点に凝り固まらず、あらゆる視点に心を開いておくことが大切であろう。そこで、学校教育においては、プレゼンテーションのスキルのような表面的な技を学ぶのではなく、もっと思考を深めるため、さまざまな視点に触れ、これまでの自分になかった視点を取り込むことが重要な課題[7]となってくる。

（榎本博明『思考停止という病理（やまい）』より）

問一 二重傍線部 a〜f について、カタカナのものは漢字に直し、漢字のものはその読みをひらがなで記しなさい。

問二 波線部①・②の意味として最も適当なものをそれぞれあとの選択肢から選び、記号で答えなさい。

①「陶酔」

イ 迷いを抱き困惑すること　**ロ** 自信を持って堂々と振る舞うこと　**ハ** 熟練し得意げになること

ニ 心を奪われうっとりすること　**ホ** 周囲を遮断し受け付けないこと

②「にわかには」

イ 明白には　**ロ** すぐには　**ハ** 簡単には　**ニ** 万人には　**ホ** 完全には

問三 [1]・[2] に当てはまる言葉をA文中から、[1] は四字、[2] は二字で探し、抜き出して記しなさい。

問四 傍線部1「補助記憶装置」とは具体的に何を指すか。A文中から三字で探し、抜き出して記しなさい。

問五 傍線部2「取ってつけたような情報提示」を言い換えた四字の言葉をB文中から探し、抜き出して記しなさい。

問六 傍線部3「説得力」を持つ意見や考えとはどのようなものか。B文中から二十字以上二十五字以内で探し、その始めと終わりの四字を抜き出して記しなさい。

問七 「　X　」に入る表現として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ 他にどんな情報がありますか？　**ロ** 過去にはどういった例があるんですか？　**ハ** 一番人気は何でしょうか？

ニ どうしてそうなるんでしょうか？　**ホ** いつ頃に発表されたものでしょうか？

問八 傍線部４「そうした落とし穴」にはまることのない人は、ネット情報をどのように活用するか。次の説明文の空欄に入る十字以上十五字以内の表現をＡ文中から探し、抜き出して記しなさい。

▼【　　】ものとして活用する。

問九 傍線部５「私たち日本人が、自己主張が苦手なのはなぜか」とあるが、この理由について筆者の考えが端的に述べられている一文をＣ文中から探し、始めの五字を抜き出して記しなさい。

問十 傍線部６「認知的複雑性が高い」とは具体的にどのようなことを指しているか。次の説明文の空欄に入る二十二字の表現をＤ文中から探し、その始めと終わりの四字を抜き出して記しなさい。

▼【　　】が身についているということ。

問十一 傍線部７「重要な課題」の内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ 自己主張する技術よりも、相手に譲るべき時は譲る姿勢を学ばせること。

ロ 海外の人たち特有の振る舞いを学び、思考力より行動力を重視すること。

ハ グローバル教育によって、自国文化について改めて学び直してみること。

ニ 他者との間柄を大切にし、日本人に固有の感性を育てる教育をすること。

ホ 発信力ではなく吸収力を重視し、能動的に思考する人間を生み出すこと。

二　次の詩を読み、あとの問に答えなさい。

欠落

新川　和江

わたしは
蓋のない容れものです
空地に棄てられた
半端ものの丼か[1]　深皿[2]のような…

それでも　ひと晩じゅう雨が降りつづいて
やんだ翌朝には
まっさらな青空を[3]
溜った水と共に所有することができます

蝶の死骸や　鳥の羽根や
無効になった契約書のたぐいが
投げこまれることも　ありますが
風がつよく吹く日もあって
きれいに始末してくれます

誰もしみじみ覗いてはくれませんが
月の光が美しく差しこむ夜は
空っぽの底で
うれしくうれしく　照り返すこともできる

棄てられている瀬戸もののことですか？
いいえ　わたし[4]のことです

（『記憶する水』より）

問一 傍線部1「井」・2「深皿」を言い換えた言葉を第二～五連の中から探し、抜き出して記しなさい。

問二 傍線部3「まっさらな青空を／溜った水と共に所有することができます」とあるが、

Ⅰ この表現から「容れもの」のどのような様子が読み取れるか。答えとなる次の文の空欄に入る言葉を、十字以上二十字以内で記しなさい。

▼【　　】「容れもの」の様子。

Ⅱ 「溜った水」とは何を表しているか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ 愛情　**ロ** 技術　**ハ** 経験　**ニ** 後悔　**ホ** 不満

問三 第三連の内容が示すこととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ 他人の嫌がる仕事が舞い込んでも、最後まで丁寧にやりきろうとする。
ロ 災いが降りかかったら、その意味をよく考えて困難を乗り越えようとする。
ハ 不要になったものでも大切に扱い、最後は自然の営みに託そうとする。
ニ 迷惑に感じることがあっても深く気に病むことなく、受け流そうとする。
ホ 嫌がらせを受けても落ち込まず、相手に対して強く抗議しようとする。

問四 第四連の内容が示すこととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ 他人に褒めてもらえるわけでもないのに、周囲に自らの美しさを見せつけている。
ロ 誰にも気づかれないところで、少しでも多くの人々を楽しませようとしている。
ハ 周囲に顧みられないことを気にせず、日々の中にささやかな喜びを見出している。
ニ いつか自分自身が脚光を浴びる日を夢見て、こつこつと努力を積み重ねている。
ホ 自分の存在を気にも留めない人たちを、いつの日か見返してやろうとしている。

問五 傍線部4「わたし」とはどのような人物か。答えとなる次の文の空欄に入る言葉として最も適当なものを後の選択肢からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を重ねて用いないこと。

▼外界からのさまざまな働きかけを【 ① 】せず、何でも【 ② 】する人物。

イ 吸収　**ロ** 理解　**ハ** 受容　**ニ** 賛美　**ホ** 比較　**ヘ** 遮断

三　次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

桜子と茜が通う星華学園高等学校は創立百三十年の伝統をもつ全寮制の女子校である。同校では三年生が一年生に生活全般にわたってルールやマナーの指導を行う「マザー制度」を実施している。以下に挙げるのは、「マザー」役の桜子が「チャイルド」役の茜を自分の母親に紹介するため、連れだって「星島祭り」に繰り出す場面である。桜子の母親・恵子も同校の卒業生であり、かつては「星華のマドンナ」と呼ばれ一目置かれる存在であった。

A　たこ焼き、カステラ焼き、フランクフルト、りんご飴、かき氷……、裸電球に照らされた出店の暖簾は、歩きながら横目で流すだけで、目に鮮やかだった。ほんの数歩先の足元さえ見えない夜陰の中で、煌々と光るそれや、人懐っこい店主の声掛けは、気恥ずかしいような、懐かしいような、変な感じだ。

1 三人で一通り見て回り、もう一度引き返して、たこ焼きと、カステラ焼きをとりあえず買ってもらった。何も言わなかったのに、店主は割り箸を三膳渡してくれた。

浜辺に設置してあったテーブル席はいっぱいで、空席を見つけられず、荷物を持ったまましばらくその場を行ったり来たりしていた。ようやく家族連れが席を立ったのを茜が見つけ、素早くテーブルを確保した。投げられたおもちゃを拾って帰ってきた子犬のように〔　X　〕で、先輩、と呼んだため、おかしくなって桜子は思わず笑って駆け寄った。

プラスチックでできた白いテーブルやイスは雨ざらしになっていたのか、少し薄汚れていた。地べたに座り込んで食べるよりはマシだろうとイスに座ろうとすると、

「桜子。止めなさい、みっともない」

母はカバンの中からハンカチを出し、さっと桜子と自分のイスの上に敷いた。

「こういうところのイスは汚れているんだから。ハンカチを使うのがマナーでしょ」

演劇部だったという母のよく通る声は今でも健在だった。たこ焼き屋のおじさんはこちらを見て明らかに怪訝な表情をしている。隣のテーブルに座っているカップルも「じゃあ私たちもみっともないってこと」と、こちらを睨んでいた。母は構わずイスに座り、2 カバンから携帯を取り出し触り始めたので、食べ始めるタイミングを失った。人を待たせることはマナー違反ではないのかと不満が募っていく。茜はポケットからハンカチを取り出

し、母と同じように敷いて座ってくれた。が、彼女はきっと、あきれている。これ以上母に、[3]恥ずかしいことをしないで欲しかった。

「恵子先輩」

声がして、思わず顔を上げた。今でも毎月集まっているであろう星華の友の会のメンバーが、五、六人、そこに立っていた。

「あら、みなさん。どうなさったの？」

母は頬(ほお)に笑みを浮かべた。

「恵子先輩が、桜子ちゃんのチャイルドさんと会うって聞いてたから、私たちもお祭りに来たらもしかして偶然会うこともあるのかなって。久しぶりに来てみたんです」

「すごいわ。こんな人ごみの中でばったり会うなんて。それこそ運命ね。こちら、桜子のチャイルドさんの一之瀬茜さんよ。茜さん。こちらは、星華出身のみなさん。卒業してもこんなに強い絆(きずな)で結ばれているのよ。桜子もあなたも、[4]同じ仲間よ。さあ、みなさんも座っていらして。お話ししましょうよ」

桜子はぎょっとしてその中年女性の集団の行動を見つめた。遠慮する言葉を一切口にせず、空いているイスを無理やり集めてテーブルに寄せてくる。そのさまはテレビで[b]失笑されている迷惑なおばさんそのものだった。家や学校の、閉じられた世界の中でなら付き合っても構わない。けれど、他人の目がある場所で、この人たちと〈仲間〉だと括(くく)られるのは耐えられない。

B　大きな声で話し合い、一通り出店を覗(のぞ)いて興味のある物を買ってきてテーブルに並べ、落ち着いたおばさんたちは、ところで、と話を切り出した。

「茜さん。あなたのお母様も星華出身なんでしょ？　何期生なのかしら？　もしかして、私たちが知っている一之瀬さんかしら？」

「いえ、母は出身ではないんです」

「……あら、そうなの。ふうん」

おばさんたちは無遠慮に茜の頭から足の先まで視線を走らせた。桜子はただじっと、息を止めていることしかできなかった。恋人を家に連れて帰り、紹介するのはきっとこういう感じなのだろう。[5]心臓をきゅっと握られ、身動きがさっぱり取れない。何とか視線を上げ、母の様子を窺(うかが)うと、彼女たちの隣で、[c]至極おしとやかにかき氷を口に運んでいる。

「じゃあ、どうして星華に？」

「……祖父母が、ぜひにと」
「じゃあ、お祖母様が出身なのかしら？」
「……いえ、そうではないんですけど、いろいろあって」
そろそろ時間だよ、と砂浜を駆けていく子供たちの声が、頭の後ろで聞こえる。明らかに答えに困っている茜を助けるためにも、例えば、「花火が始まるみたいだよ」と話を逸らせたらいいのに、いっこうに声が出ない。学校の中では、あれほどすらすらと嘘が出てくるのに、大事なときに限って口は動いてくれない。
「みなさん、あまり質問攻めにしたら、茜さんが可哀想よ。ねえ？」
茜に微笑む母の顔を見て、鳥肌が立った。
星華の友の会の人たちと会ったのは、偶然なんかじゃない。母に仕組まれたことなのだと急に思い当たる。テーブルについた途端、携帯を開いていたのはきっと彼女たちに居場所を知らせていたのだろう。自分が訊きたいことを、彼女たちを使って知ろうとしているのが、手に取るように分かる。それが彼女のやり方だ。自分の手を汚したくないだけだ。
「……じゃあ、茜さんは、〈純血〉ではないのね。残念だわ」
非常識なおばさんの中の、誰かがそう呟いた。欲しいおもちゃが手に入らず拗ねた子供のようにふて腐れた彼女たちは、会話を放棄して黙り込む。訪れた沈黙に、桜子も茜も、口を開くことは許されていないように感じた。
「みなさん。そんな風に言うものじゃないわ。星華の後輩なんだから、優しくしてさしあげないと。〈純血〉だってそうじゃなくたって、関係ないことでしょう？」
右手で髪の毛を耳にかけて、母は茜のことをまっすぐ見つめた。心にも思っていないことを口にしていると、桜子はすぐに分かった。嘘や本心ではないことを話すとき、母はいつだってそうやって身だしなみを整え、身構える癖がある。
桜子は今すぐ立ち上がって、母のことを殴り、蹴り飛ばしたかった。あなたほど下品でみっともない女はいないと、罵り、打ちのめしたい。が、いつだって、そんなことはできない。
彼女たちの言った〈純血〉というのは、代々星華を卒業している家系のことだった。桜子の家系は曾祖母の代から星華に通っていて、それが母の自慢

だった。星華の友の会に呼ぶ人たちも、最低でも母親が星華出身であるということを条件にしていた。

それがどれほどの価値があるのか、桜子にはさっぱり分からなかったし、分かりたくもなかった。母のやっていることは、低俗な差別と苛(いじ)めに過ぎない。

C ひゅうっと伸びやかな音が聞こえたかと思うと、バリバリと空気が震えた。同時に歓声と拍手が沸き起こる。視界の端で空が明るく光るのが分かったけれど、堂々と花火を見上げることはできなかった。石(せっ)こうで固められたように、体が動かない。茜がどんな顔をしているのかも、確かめることができなかった。

「桜子、ここからは別行動にしましょう？　おばさんたちと一緒だと楽しめないでしょ？　帰るときは連絡して。一緒に帰るわ。それじゃあ、茜さん、会えて嬉(うれ)しかったわ。気をつけて帰ってね。ごきげんよう」

きゃあきゃあ言いながら固まって歩く母たちの後ろ姿は、[6]いくつになっても女子だった。いい大人がそれをするのは、娘から見ても嫌悪感しか抱けない。

ようやく金縛りが解け、すっかり表情が抜けてしまった茜の顔を見て、桜子は身を引き裂かれるような思いがした。

「茜さん。ごめんなさい。[7]母の言ったことは気にしないで」

頭を下げると、茜は首を振った。顔には苦笑いが浮かんでいる。

「別にいいです。本当のことだから。こっちこそ、すいません。お母さん、きっとがっかりしたんですよね。私みたいなのがチャイルドで」

「あなたは何も悪くないわ！」

言った途端、涙が溢(あふ)れた。くしゃりと歪(ゆが)む顔を必死で堪(た)えながら茜のことをまっすぐ見つめる。桜子の声に驚いた茜は桜子を見たまま固まった。

「悪いのは母よ。あんな〈純血〉だなんて言葉を使うこと自体、下品で、人として最低だわ。私は母の言っているようなこと、少しも思ってない。許してなんて言わないわ。でも、どうか、どうか、私のことを嫌わないで」

震える手で、茜の腕をつかむ。彼女は目を丸くして桜子の瞳を覗き込んだ。あれほど嫌な目に遭わせて、それでもなお、自分の側にいて欲しいという願いはどんなに身勝手か、分かっているつもりだった。※正子が逃げたように、きっと茜も母と関わり合いになりたくないはずだ。娘である桜子自身が、そうなのだから。

ふっと茜が息を吐くのが気配で分かる。……そして、

「嫌ったりしませんよ。親と子供は別ですから」

パンっという大きな音と同時に、茜の笑顔が照らされた。桜子の全てを信じ切っている。そのことが酷(ひど)く痛く、仄(ほの)暗い喜びとなって胸を締めつける。

違う。[8]私はあなたが思っているような人間ではないのだと、叫び出したい気持ちを堪(こら)え、ありがとうと微笑を浮かべる。きっと今の顔は、母にそっくりだ。

〈血統〉にこだわっているのは、桜子も同じだった。ただ母と違うのは〈純血〉ではない、星華の匂いがしない人が好みだということだ。あの小さな世界の価値観に染まっていない茜だからこそ、何としても手に入れたかった。

どちらからともなく立ち上がり、波打ち際へと足を進めた。他の人たちがしているように、砂浜に座り込む。ハンカチなんて必要ない。みんなが同じように海の方を向き、空を見上げていると、初めて会った人たちなのに、寄宿舎の食堂に並んでいるときよりもずっと、落ち着くことができた。

（宮西真冬『友達未遂』より）

（注）※正子……高校時代、桜子の母・恵子に面倒を見てもらった「チャイルド」。卒業後も長く恵子を崇拝していたが、恵子の本性に気づいてからは関係を絶つようになった。

問一 波線部a～cの意味として最も適当なものをそれぞれあとの選択肢から選び、記号で答えなさい。

a「怪訝」

イ 気の毒そうな　**ロ** さびしそうな　**ハ** 話しづらそうな　**ニ** 腹だたしそうな　**ホ** 不思議そうな

b「失笑」

イ 思わず吹き出してしまうさま　**ロ** 仕方なくあいそ笑いするさま　**ハ** 意味ありげににやつくさま

ニ お腹を抱えて笑いこけるさま　**ホ** 冷ややかに顔をゆがめるさま

c「至極」

イ いつもどおりに　**ロ** 興味なさそうに　**ハ** きまり悪そうに　**ニ** このうえもなく　**ホ** わざとらしく

問二 傍線部1「三人で一通り見て回り」とあるが、「恵子」は自分と「桜子」のことしか考えていない。それはどのような動作に表れているか。答えとなる一文をA文中から探し、その始めの五字を抜き出して記しなさい。

問三 〔　X　〕に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ おどけた顔　**ロ** すました顔　**ハ** 疲れきった顔　**ニ** はしゃいだ顔　**ホ** 得意げな顔

問四 傍線部2「カバンから携帯を取り出し触り始めた」とあるが、

Ⅰ 誰に何を伝えるために連絡しようとしているのか。次の説明文の空欄に入る言葉をB文中から探し、抜き出して記しなさい。ただし、1には十字以上十二字以内の言葉、2には三字以上五字以内の言葉を入れることとする。

▼【　1　】に自分達の【　2　】を伝えるため。

Ⅱ 「恵子」は、その人達を呼び集めて何をしようとたくらんでいるのか。次の説明文の空欄に入る二十二字の言葉をB文中から探し、その始めと終わりの五字を抜き出して記しなさい。

▼「茜」に関して【　　】としている。

問五 傍線部3「恥ずかしいこと」とあるが、何が「恥ずかしいこと」なのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

イ 周囲の人の迷惑をかえりみず大きな声で話すこと
ロ 自分は名門校の出身であると周囲に自慢すること
ハ マナーにこだわることで楽しい雰囲気を壊すこと
ニ 買ってきた物を食べずに携帯をいじっていること
ホ 無遠慮に周囲の人を見下すような発言をすること

問六 傍線部4「同じ仲間」とあるが、「恵子」にとって「仲間」とはどのような存在か。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

イ 公正な目で批評してくれる存在
ロ 自分の言うことに忠実に従う存在
ハ 精神的な絆で強く結ばれた存在
ニ 足りない所を補ってくれる存在
ホ 長い期間苦楽を共にしてきた存在

問七 傍線部5「心臓をきゅっと握られ、身動きがさっぱり取れない」とあるが、

Ⅰ このような状態を比喩を用いて表現した一文をC文中より探し、その始めの五字を抜き出して記しなさい。
Ⅱ また、このような状態を一語で表現した言葉をC文中より探し、抜き出して記しなさい。

問八 傍線部6「いくつになっても女子だった」とあるが、ここでの「女子」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ 他人の目を気にせず自分勝手に行動する人たち
ロ 自分の興味関心に応じて計画的に遊ぶ人たち
ハ 気の合う仲間同士でおしゃべりして楽しむ人たち
ニ 大人になっても純粋な気持ちを忘れない人たち
ホ 隠し事なく全てをさらけ出している人たち

問九 傍線部7「母の言ったことは気にしないで」とあるが、「桜子」は「恵子」が「茜」に対してどのように思ったと捉えているか。次の説明文の空欄に入る言葉をB文中から探し、抜き出して記しなさい。ただし、1には十三字の言葉、2には二字の言葉を入れることとする。

▼【　1　】ではないので【　2　】に思ったと捉えている。

問十 傍線部8「私はあなたが思っているような人間ではない」とあるが、普段の「桜子」の様子がうかがえる部分をB文中から二十二字で探し、その始めと終わりの四字を抜き出して記しなさい。

問十一 「桜子」と「恵子」の関係について、

Ⅰ 「桜子」にとって「恵子」はどのような存在か。次の説明文の空欄に入る言葉を文中から探し、抜き出して記しなさい。ただし、1にはC文中の五字以上十字以内の言葉、2・3にはそれぞれB文中の二字以内の言葉を入れることとする。

▼【　1　】に染まっていて、そこに収まらない人間を差別したりいじめたりする【　2　】で【　3　】な人間。

Ⅱ 「恵子」に対する「桜子」の反発はどのような行動となって現れているか。答えとなる一文をC文中から探し、その始めの五字を抜き出して記しなさい。

以下余白

国語解答用紙

受験番号

氏名

合計

一

問一
a カンダン
b ヒロウ
c 拭（え）
d スイショウ
e キタ（える）
f 陥（ら）

問二
①
②
問三
1
2

問四

問五

問六 始め 終わり

問七

問八

問九

問十 始め 終わり

問十一

小計

二

問一

問二
Ⅰ 10
Ⅱ

問三

問四

問五
①
②

小計

三

問一
a
b
c

問二

問三

問四
Ⅰ 1 10
Ⅱ 始め 終わり
2

問五

問六

問七
Ⅰ
Ⅱ

問八

問九
1
2

問十 始め 終わり

問十一
Ⅰ 1 5
2
3
Ⅱ

小計